



マッセ・市民セミナー（ちやいんどネット大阪・マッセOSAKA共催講座）（河北ブロック）

「保育の中の子ども声」

～時代が求める「保育の質」を問い直す～

加藤 繁美 氏
(山梨大学)

1

1. はじめに

今日のテーマは「保育の中の子ども声」です。子どもたちの声を大事にしながら保育したいということは、恐らく皆さんが毎日考えていることだと思います。私たちに付き合わせるのではなく、私たちが子どもたちの声に合わせていきたいと、毎日保育を革新してつくっていらっしやると思います。

小さい赤ちゃんから小学校に入るまで、子どもたちが人間としてだんだん大きくなって、そういう中で発する声をきちんと聴き取っていこうということで、これまで実践をつくってきたと思います。ここで言う「子どもの声」というのは、子どもがしゃべる声だけではありません。赤ちゃんたちは、まだ自分の思いを自分の言葉で語ることができません。でもおなかがすいたら泣くわけです。その泣き声を出しながら、「おなかがすいたよ」ということを表現しています。気持ち悪くてなかなか寝付けなと思うとぐずります。ぐずったり、不快な顔をしたりしながら、子どもは自分の心の声を表現していくのです。

保育者はそれを聴いて、その思いに応じてやろうと思い、そして実践をつくっていきます。常に保育というのは応答的で対話的な営みなのです。私たちに付き合わせようと思っても、赤ちゃんは付き合ってくれません。給食だからと言って、この時間になったらおなかがすきなさいと言っても、みんなが一斉におなかがすくわけなし、本当はお昼寝だって、一斉に眠くなるなんてことはあり得ないのだから、みんな一斉に寝させること自体が子どもには申し訳ないのです。それでも一人ひとりの声を大事にしたいけど、ごめんねと言いながら、私たちの時間にお付き合いしてもらっているのです。

保育は、大人にどう付き合わせるかということよりも、子どもが自ら育とうとする力、自分を表現しているものにどう応えていくかということで、ずっと保育の在り方を考えてきたと思うのです。これまでも保育所保育指針、幼稚園

教育要領の改定の中でも、そういうことが大事ということは言われてはきたのだけれども、実は今回の改定は、最後に時間があったら話しますが、特徴は幼、小の接続問題です。これからどんどん告示された中身についていろいろ勉強する機会があり、解説書がちゃんと出されて、今年1年かけてその新しい指針についても学びを深めるということになっています。

幼小接続ということで、今回の改定の一番のポイントは、幼稚園教育要領も、保育所保育指針も、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領も、全部含めて、小学校に入るまでに育てる10の姿が提示されていることです。つまり、小学校に入るまでに、10項目に分類された力をちゃんと育てて学校に上げますから、小学校の先生、安心して下さいねというのが、今回の改革の一番の目玉になっています。

それを保育の目標にしなが、つまり、「それが育つことを考えながらカリキュラムマネジメントをして、ちゃんと育つよという証拠付きで学校に送ってください。そうしたら、小学校では10項目に分かれた力が育った子どもを本当の学びにいきないます」ということです。でも、社会性がありましたね、何とかがありましたねと、人間10も記憶できないと思います。5領域（健康・人間関係・言葉・表現・環境）でも忘れるのですから、10も覚えるというのは困難です。覚えられないものは使えないのです。だから頭の中で10の力を育てるように考えても、現実にはリアリティはないのですが、小学校の先生はそれが育つものとして、幼稚園、保育園に期待するわけです。上がってくると、「この子、どうされたのですか。ちょっと社会性と協同性が育っていないのですが」と言われるのです。そういうことを考えながら、小学校の先生に気を使って、ちゃんと一から育てていきますからねという保育をすることは、今日テーマの「保育の中の子どもの声」とは反対の方向へ行きそうな危惧があります。

私たちが本当に大事な子どもの声を聴き取りながら、ちゃんと力を育てて学校に上げればいいのだけれども、その逆転の発想、学校から下へ下ろして、そこへ行くまでにこういう力を育てますということで5歳児の保育を考え、5歳をそうするために4歳をこうしますと、上から下へと子どもの育ちの目標を語るの、間違っているのではないかと僕は思ってしまうわけです。赤ちゃんから育っていく道筋はみんなばらばらなのです。だから3歳児のクラスと言っても、4月生まれと3月生まれでは人生の履歴に1年の差があるのです。その子



どもに同じものを求める。そういう力が働くことが保育をゆがめそうな空気があります。僕はそれに対して保育はきちんと向き合わなければいけないと思っていますが、そういう空気の中で一人けちをつけているのが嫌なので、勝手にこういう話をします。

2. 子どものいろいろな声

そんな中で子どもの声をどう大事にするかということをお話しますが、頭の中で分かっていてもこれは難しいことがたくさんあります。今日は少し涼しいからいいのですが、2～3日前は暑かったです。ああいう暑い日になると、子どもたちは朝来たら水を出して遊びます。僕は山梨大学附属幼稚園の園長をして4年目です。附属幼稚園の園長なんて、大学の仕事のついでにやるので、ほとんどは仕事をやらなくて、そんなに力も注げないのです。

でも行くと、この5月から6月にかけて、特に気になるのが4歳児のE君です。この子がもう大変なのです。来たら目を輝かせて、水道が園庭に面したところに四つあるのですが、その水道を全部出して、そこから雨どいのようなものを使って、園庭に水を全部集めるのです。そして水が集まるとそこに池ができます。その池をつくるために穴を掘って、水をためるのです。たまったらその中をばしゃばしゃと走ります。気持ち良さそうですが、走って外へ行くと足が汚れます。この前、隣にSちゃんという女の子が来て、汚れてぬるぬるした足で、この子の着ている服を汚そうとして、足を上げておなかをぼんぼんと蹴るのです。蹴ったら「やめてよ！」と言うのだけれども、「やめてよ！」と言うことが面白くなってまた蹴るのです。

子どもはそういう思いを持って生きていて、子どもも面白いよねと、見ていだけではいけないのではないですか。Sちゃんは苦しんでいるし、好き勝手にやっては駄目だよと思うわけです。子どもの声を大事にしなければということも百も承知なのですが、そのE君の声を、どういうふうに私たちが大切にすればいいのかというと難しいです。「Sちゃんのおなかを蹴りたいんだね」と言って蹴らせても仕方ありません。「やめなさい」とただ叱るのも芸がないです。

保育の中で、本当に子どもの声を大事にするというのは簡単ではないのです。「お昼寝するよ」と言っても、「眠くない」と言って抵抗する子がいるわけです。

その子には「眠くないんだね」と言ったら寝やしないし、一人外で走り回ったら、他の子まで目が覚めて起きます。「この子は積極的で、能動的で」という一言でくれないところに実際の難しさがあるわけです。子どもの声は大切にしなければいけないと言うけれども、全ての声を同じように大切にできるわけではないから、保育者は腐心するのです。あなたがこの社会を生きる人間に育っていくためには、あなたの思うとおりに生きるだけでは駄目になるんだよという思いがあります。でもあなたの思いも大事にしなければ駄目だよという思いもあります。その関係にどう折り合いをつけさせるかというのは、本当に現実難しいのです。

そして、先ほどのE君がSちゃんのおなかを泥足で蹴る。そういうときにどういう対応をしなければいけないのか。そんなことはどこにも書いてないのです。そういう具体的なことには、皆さんが自分の勘とコツで応答するしかないわけです。ところが、その勘とコツが100人いたら、100通りの勘とコツを持っているもので、そこですぐに怒る先生に、他の先生は「何でここで叱っちゃうかな」と思ってしまうわけです。保育を分かり合うのは難しいのです。

子の声をちゃんと聴く。その精度を高めていかない限り、保育の質は高まらない。そういう具体的な問題を私たちはどう考えるのか。この時代だけではないのですが、保育の質というのは保育者の質なのです。子どもの声を聴き取り、返していく。子どもの声と対話する保育者の質を問い直していく、そういうことをしなければいけないのです。

そうは言うものの、子どもたちは面白いことを考えながら生きています。僕たちは1970年代ぐらいから、口頭詩と言って、子どもがぼそっとつぶやいた言葉の中に、子どもの心の声、思いを読み取っていかう、子どもに共感するということを大事にしてきました。口頭詩、つぶやきです。このつぶやきを書き留めてみるだけで、子どもはこんなことを面白がって生きているのだな、こんなことを考えているのだなということが分かります。

これはイケガヤセイ君、5歳児の言葉です。『『言葉』イケガヤセイ5歳。『ああ、僕日本に生まれて良かった。外国に生まれていたら言葉が全然分からなかった』。5年も生きて、こういうことを深刻に悩んでいるのです。悩んでも仕方ありません。でも彼は、自分が日本語しかしゃべれないのに、フランスなんか生まれたらどうやって生きていくのだろうと悩むのです。』



『おかしいな』ワダヒロノリ3歳。『お母さん、どうして外側は首で、中は喉なの』。分かりません。不思議なのです。同じ場所なのに、外から見れば首と言ひ、中から見れば喉と言う。この差は何なのかとこの子は悩むのです。

『お父さん』コシギリモエコ4歳。『お父さん、遊んでくれてありがとう。助かるわ』。助かるかどうか分かりません。お父さんは愛されていていいですが、お母さんの方はちょっと違ってします。

『お母さん』ノグチシュン3歳。『さっきは優しい人だったのにな』。母親は豹変するのです。

こんな子もいます。「先生、遊ば」「うん、何する」「すぐくつまない絵本見るのと、私のこと抱っこしてぎゅっとするの、どっちがいい？ どっちでもいいよ。でも絵本は本当につままないやつだよ」。あなたを抱っこするしかないですね。

優しいことを言う5歳児もいます。「先生、デブじゃない。太ってるだけ」。ほぼ一緒です。

泥団子を持っていて、「下に置いちゃ駄目だよ。汚れるから」。もともと泥だったのですけどね。

こんないい子もいます。『おしり』ウチダナオキ5歳。『おしりって役に立たないね。ぶたれるだけで』。

おしり拭きのプロ。「僕のママね、僕のおしり拭くの上手なんだよ」「いいな、僕も拭いてほしい」「じゃあ今度おしり拭きにうちにおいで」「うん、行くね」。子どもたちはいい会話をしていますね。

次は、一人の女の子が、紙パック入りのコーヒー牛乳を買ったとき、車に乗って、後部座席から急にしゃべった一言だそうです。「ようし、大人になるぞ」。コーヒー牛乳を飲むのは大人と彼女は決めているのです。気合いを入れて飲みはじめましたと書いてあります。

これはお母さんと電車に乗って一緒にいるときに目の前で堂々とチューをしている若いカップルがいて、車内はみんな目のやり場に困り、いたたまれない空気が流れている中、「あのお兄さんとお姉さん、チューしてる」と、大声で場所をわきまえずにしゃべりました。そして、「静かにして」と言おうとしたとき、子どもが先に「すてきだね、愛だね」と言ったそうです。この子の言葉に救われたと書いてあります。

給食のときに、こんなことをぼそつと言う子がいたそうです。「僕は野菜を食べるために生まれてきたんだ」。

3. 子どもは子どもの世界を生きている

いろいろなことを子どもはしゃべるわけです。一つひとつの子どもの言葉に耳を傾けていると、こんなことを思っているのだなこの子とか、こういうことを発見しながら生きているのだと、子どもの一生懸命さに脱帽ですね。子どもと一緒にいて一番面白いのは、彼らは決していかげんに生きていないところでしょうね。何に対してもすごく一生懸命になるのです。ダンゴムシやイモムシを集めることに命を懸けるわけです。だから何なのだと思います。そういうことを本当に彼らはさぼらずに頑張るのです。そこに頭が下がります。僕らはいかに脱力するかということを大事に生きているのだけれども、彼らは疲れ果てるまで頑張って生きます。そういうところはたくましいと思うのだけれども、それだけ集中してやりたいことを持っている子は、保育者の言うことを聴いてくれないわけです。これが辛いのです。

能動的で主体的な子どもを育てましようと言うけれども、そういう子を育ててしまったら、保育者が「もう入ってきてね」と言っても、絶対入ってこない子になってしまいます。だから、下手に能動的な子を育てるなんて言っては駄目です。私に付き合いのいい子を育てましよう。本心がそうなら、そういう保育をすればいいのです。本気で子どもが主体的に生きることを大事にするのなら、そうやってとことん面白いことをやっていたら、「もうお部屋だよ」と言っても「いや」という子を、本当にたくましいなと心底思えるような私たちでなければいけないのです。でもこれって難しいですよ。なぜか。それはやはり私たちの中のどこかに、内なる管理主義と言ってもいいですが、みんながお付き合い良い方がいいというのが無意識のうちにあるからです。そのバランスがすごく難しいです。

でも、そういうことは保育者自身の問題だけれども、こうやって本当にいろいろなことに一生懸命生きていると思う子どもたちだって、それほど単純に生きているわけではないのです。この25年ぐらいの間で、例えば児童虐待の問題が深刻になっていきました。虐待を受ける子どもがどんな心の中で生きているかと言ったら、「僕は野菜を食べるために生まれてきたんだ」と宣言しながら



生きる心の余裕がない子どもたくさんいるのです。虐待とまでは言えないですが、今年の4月からいろいろな園でいろいろなことを聞いた中で、例えばこんな子どもの事例を語ってくれた人がいました。少し不思議ではありましたが、新しいタイプの子どものかもしれないと思いました。いや、子どもではありません。親が変わってくると、親子関係が変わると、子どもの育ちは3～4歳のときにうんと変わってきます。

これは3歳児のある幼稚園の実践事例です。入園式の日から「春ですよ」の遊び歌をクラスで楽しんだ3歳児のクラスです。「春ですよ」と言って、最後に花がぱっと咲くという遊び歌があるのです。それに毎日のように子どもたちがうたっていたら、ノってきて、4月の半ばになるときはその歌が大好きになって、つい口ずさむぐらいにはやっていました。担任は私の実践が良かったと思いつつ、これを楽しそうにうたって、今日もうたおうかなと準備しているときに、R君という男の子が不安そうな表情で近づいてきました。そして、「今日も歌うたう？」と聞いてきたのです。「うん、うたおうと思っているよ」と言ったら、「うたわないで、お願い」と言ってきて、「どうしたの？」と聞いたら「怖いのです」「春ですよ、春ですよ」というだけの歌ですから、怖くなんかないのです。先生も「何も怖い歌じゃないじゃん」と言ったら、「お花が咲きましたってやると怖い」と言うのです。その理由が最初は分からなかったのですが、担任が子どもと後で話しているときに、「この歌が嫌いな？」と聞くと、「嫌いじゃない」と言うのです。「なぜ怖い？」と聞いて、分かったことがあります。この子はあまりにこの歌が好きで、家に帰ってもうたっていたのです。そうしたらお兄ちゃんはその歌を聞いて、またノってきて、兄弟二人でこの歌をうたっては「ぱっ」とやっていたのです。こうやって家の中でうるさくうたっているのに、この歌をうたうとお母さんが「うるさい、静かにしなさい」と怒鳴るのです。「この歌を僕らがうたうと、お母さんがいつも怒る。だから怖い」と言うのでした。

普通、保育園、幼稚園で歌を習ってきて、それを家でも楽しそうにうたっていたら、「こんなことをうたってるだ、いいね、気持ちいいね」と言うものですが、このお母さんは、そうやって園でうたっている歌を楽しそうに自分の子がうたっていることを一緒に共感的に喜べないのです。家の中で騒がしいことを言うこと自体に腹が立ち、幼稚園でその歌をうたっているということ、しか



も頭から「ぱっ」と花が咲く馬鹿みたいな歌をうたっているということに腹が立つ。園に来て、「こんな歌をうたって、手で頭から花を咲かせるんですよ」と言ったので、「園でやっていますから」と答えたら、「先生まさかそんなことをやっていないでしょうね」と言う。こういう親がいること自体が不思議です。

そういう親でも子どもが楽しそうにやっていることは共感的に喜んでくれると思ったのだけれども、そういう喜び方をしてもらえない子どもがいて、その子が園に来て、解放されればされるほど、家に帰って怖いことが起きる。それを予測しながら生きている3歳児がいることが少し怖かったです。そういう思いで、自分の声を抑えながら生きなければいけない3歳の子が既にいるということ、これが現実なのだなと思いました。そう考えたら、子どもたちの声というのは、本当に能動的で、子どもが自身の思いを表現したものですよねと気楽に言っている場合ではないかもしれないという気もするのです。

4. 子どもの声の二重性

いつも子どもの声を考えるときには、この二重性があるということ私たちが考えなくてはいけません。それは表面に表れた声と、その声が表現する本当の声です。普通の場合、幼児は、今までだってこれからだって、この二重性をいつも持っているのです。言いたいことをすっきり言えるだけの言葉を持っているわけではありません。子どもたちがぼそっとしゃべった声は、本当に言いたいことを全部表現したわけではないから、そこから、本当にこの子が表現したい真実の声を読み取っていかなければいけません。

さっき、コシギリモエコちゃんという4歳の女の子が、「お父さん、遊んでくれてありがとう。助かるわ」と書いていました。「助かるわ」という日本語は、確かにこの文脈からしたらおかしいのです。でも彼女が「助かるわ」という一言を言った背景には、もっともっと多様で深い思いがあるのでしょうか。いつもより早く帰ってきたお父さんを見て、「今日いっぱい遊べてとてもうれしい、何して遊ぼうかな、これもこれもこれも一緒にしようね」という思いがあります。それをたくさんお父さんとできることがうれしくて仕方がないのです。そんな気持ちを「助かるわ」という一言に置き換えたのです。

子どもの言葉というのは、常に寸足らずの服のようなところがあって、言いたい意味の世界にぴったりの言葉を出すことは普通はなくて、取りあえずこれ





でというので簡単に出すのです。その言葉の中に込められた本当の思いを読み取ってやる。私たちがそれを置き換えて、「そうなんだ、お父さんと会えてとってもうれしかったんだね。いっぱい遊ぼうと思ったんだ。何して遊んだの」と補ってやることで、「あのね…」という形で、「助かるわ」の裏側にある本当の思いを言葉にすることができるのです。そういう読み取り方をしてやらないといけないのです。

でも、実は子どもの声の中に、語りたくない、マイナスの思いがひそみ、それが子どもたちの荒れた言葉などに表れている、そんなことも現実にはあるのだろうと思いました。

名古屋の保育園の園長をやっているある人が、こんな事例を紹介してくれました。5歳児のカイ君という男の子がヨウ君という子どもに対して、いきなり怒りをぶつけたその場面の記録から始まっていました。ヨウ君が1週間ぐらい病気で休んでいました。病気が上がりで園に来たときに、お母さんと一緒につくった「頑張ろうね」という紙バッジを持って、母さんの励ましを胸に彼はやってきたのです。そして大事そうにしている紙バッジを、カイ君が急に引きちぎって、「こんなの持ってくるな」というすごい剣幕で怒ったというのです。なおも罵倒し続けるカイ君を大泣きのヨウ君から何とか引き離して、事務室で静かに話を聴きました。

園長先生が、「ヨウ君はずっと熱でお休みしていたから、おうちでつくってきたバッジなんだって」と言いました。そうしたらカイ君は「いかんのだわ。保育園におもちゃ持ってきていかんのだわ」と言って、「自分でつくったものでも駄目かな」と聞いたら、興奮しきりで、出続ける悪態の合間合間に、こんなことをぼそっと言ったのです。「僕なんてそんなのつくったら、いかんと言われるんだ」と言って、「ヨウ君は駄目だ。マサキ君、ツバサちゃん、ミイちゃんはいいけど」と言うのです。「ヨウ君は駄目なのか。マサキ君、ツバサちゃん、ミイちゃんって…」とつぶやいたときにこの先生は気付くのです。

この三人の名前を聞いてはっと思いました。実はこの三人は、毎日カイ君と一緒に夕食保育を過ごしている友達だったのです。それに対して、ヨウ君は毎日3時半に親が迎えに来る子どもで、夜の7時半まで園にいる仲間の子は許せるけれど、3時半に迎えに来るヨウ君は許せんのじゃということです。「そうだ、マサキ君たちはいつも夕ご飯までいて、頑張ってるんだ。だけどヨウ君はいつ

だって早い迎えだから許せんのじゃ」と、5歳のこの子が言うのです。

カイ君が悪いわけではありません。カイ君の親が悪いわけではありません。早く迎えに来るヨウ君のお母さんが悪いわけではありません。ヨウ君が悪いわけではありません。誰が悪いわけでもないのだけれども、毎日12時間保育を受けているこの子たちが、寂しい思いを四人でいつも分かち合っているわけです。その四人は言葉にしないけれども、お母さんが迎えに来るのを、「今日も遅いね」と言いながら、ご飯を食べて待っている、頑張っているのだと自分たちでは思っているのです。

それがいつもいつも早く迎えに来てもらって、お母さんに甘えることができ、病気だからと1週間も休んで、お母さんに励ましのバッジなどをつくってもらって、それを得意げに持ってくる、「このヨウ君が許せんのじゃ」と言うのです。この言葉が出たからまだ良かったけれども、そういう思いを胸に持ちながら言葉にできないで生きている5歳児が現実にいるのも事実です。一人ひとりの子どもを責めることはできません。それはこの社会の現実が子どもの心に複雑な思いをつくっているということだろうと僕は思います。

それがこの時代の保育の現実であり、この時代を生きる子どもの声の現実なのです。だから、いらついで、他の子にぱっとぶつかっていく子もいます。それから、僕は『対話的保育カリキュラム』という本を書いているときに、東京の杉並で5歳の子どもがめちゃくちゃ荒れている姿に出会いました。その相談を受けたことをその本の中にも少し書きました。

この子の場合は、お父さんが2歳のころからずっと虐待をしていて、年長のときにお父さんとお母さんの離婚が決まって、お父さんが6月に家を出ていき、お母さんとの生活が始まっていき、そこから人生のやり直しをするというぐらいにみんなが頑張ろうねと言い合っていた矢先、彼はめちゃくちゃ暴れたのです。園の中でも保育者の髪の毛を引っ張り、頭突きをするという形で、本当に大変な状況だったとその担任は書いていました。この子が暴れるので、運動会ときには18人しかいない年長クラスなのだけれども、四人も保育者を置かないと保育できないくらい大変な状況でしたとも書いてありました。

無理やりにでも他の子を引き離しているときに、その子が、「俺を階段に連れていけ～。階段から飛び降りて、骨を折って死んでやる～」と叫ぶのです。「包丁持ってこい。おなかに刺して死んでやる～」と、1日5回以上死んでやると



叫ぶというのです。その「死んでやる」という言葉を聞いて、「そんなことを言わないだよ」と言うのだけれども、その子に時間をかけているうちに、ここはあと二人被虐待児がいるという最悪で大変なクラスで、18名中3名も虐待を受けた子がいるような年長クラスのは初めて見ましたが、あとの二人の子どもが、「俺だってちゃんと見ろよな」と暴れはじめるのです。

この先生はまだ3年目ぐらいの先生で、「あー○○ちゃん、どうしたの」と、三人を三角で回っているうちに、毎日クラス全体が気持ち良く何かをやったという経験も一度も持たないまま、1学期が終わってしまいました。15人の子どもと気持ちを一つにしないまま1学期が終わる。そんな保育をしてしまったら、保育者としても自信がなくなるわけです。そして秋になると運動会があります。そのクラスで運動会をどうするかと言ったら、親たちの期待はあるけれども、みんなで一緒にやろうとしたら暴れはじめるのです。

その子たちが何かいらついているから、園内の狭いところでぶつかり合うのではなくて、外へ連れていこうと思って園外保育に連れて行って、公園の広いところで遊ぼうと遊ばせていたら、友達とトラブルになった途端に、「車にひかれて死んでやる」と道路の方へ走っていくのです。その子を追い掛けて、捕まえて、本当に命がけて保育をしていましたという、そんな子どもの事例もありました。

一人ひとりの心の中は、今までの心理学のテキストに書いてあるように、「3歳はこんな心の育ちですよ、4歳児はこういう育ちですから、それを受け止めましようね」ときれいに書いてあるようには育っていないのです。この社会の中で、かなり複雑な思いを持ちながら、既に声を発している子どもたちの声も含めて、丁寧に丁寧に聴いてやるのが私たちの保育の課題なのです。

でも一人ひとりに七転八倒しているだけでは駄目なので、プロの保育者はそういう声を持った子が増えているこの現実だからこそ、声の聴き方のレベルを高めなければいけないのです。2歳児のときに、どういうふうにも子どもの声を聴いてやるか。3歳の声をどう聴くことが私たちの仕事なのか。そのことに大きな方針を持たないと、本当に一人ひとりの勘とコツだけででは大変なのです。だから、子どもたちの心の育ちに対応して、ちゃんと声を聴いてやるということが大事なのだと思います。

5. 子どもの声を受け止めて切り返す

そうは言うけれども、実は子どもの声を聴くということは難しいのです。本当は科学の力が私たちに何かを与えてくれるかもしれないという話を先にしようと思ったのだけれども、実際には、いろいろな不思議な複雑な思いを持った子の声を聴くというのは、本当に大変なのです。先ほどのカイ君のような思いを受け止めることは大変、そしてさっき言った虐待を受けた子どもの声を受け止めるというのは本当に大変です。

それは分かるのだけれども、普通の子ども声だって、そうちゃんと受け止められるわけではないです。本当に楽しそうに泥んこ遊びしている子が部屋に帰ってこないときに、私たちはその思いをどういうふうを受け止めるかと言ったら、それはよく分かりません。この難しさが私たちの中にあるのです。

「啐啄同時」という言葉があります。これは仏教用語らしいのですが、「啐」という字も、「啄」という字も両方とも「つつく」という意味があるそうです。口偏に卒業の卒と書いた「啐」は、親鳥とひなの関係について語った比喩的な言葉だと言われています。鶏が卵を産みます。卵を温めると、卵がだんだん成熟して、中のひながそろそろ外へ出たいよというメッセージを出してきます。卵の内側から、つつんと口でつついて、親鳥にメッセージを送ることを「啐」という言葉が表しています。そうしたらそれを聞いた親鳥が、音がしたところを外側からまたつつんとくちばしでつついてやるのが「啄」なのです。「啐」というメッセージを聞いて、「啄」という行為をしたときに、殻が割れるのです。そのときに雛鳥が誕生するという比喩です。

保育においては、子どものその思いにぴったりいいタイミングで返すときに、子ども自身が育っていくわけです。そういう関係をつくるのが私たちの仕事なのだけれども、これがなかなか難しい。それはなぜかと言ったら、保育者自身にもさまざまな感覚があり、思いがあり、感情があり、身体感覚があるからです。子どもの思いに対して、腹が立つこともあるわけです。子どもの思いを、同じような思いなのだけれども喜ぶ人もいるし、喜ばない人もいます。その感性の違いが、「啐啄」の「啄」の方に表れてくるのです。恐らく子どもの方は素直に「啐」というメッセージを出すのだけれども、それに対して意地悪な人は「あんた、まだちょっと早いんじゃないですか」と言ってさぼろうとするし、いろいろな対応の仕方をするのです。



僕は『記録を書く人 書けない人』という保育実践記録を書く本を書いたのですが、それを書くために全国の保育者の記録を集めていきました。横浜で、実践記録を基に保育研究をする研究会を年に4回、6年ぐらい繰り返していた中で、出会った一人の先生がいました。この先生は新人だったのですが、僕はその新人の先生の記録を読んだときに、「啐啄同時」が難しい時代になってきたなと思いました。

先ほどは子どもの育ちの中に難しさがあり、子どもの「啐」の声の中にも複雑な思いがあるということを言いました。でも普通の声もちゃんと聴けない、「啄」の方のセンスがちょっとという人が生まれたのだなという保育者が現実にはいました。その先生の悪口は言いたくないのです。なぜなら、そういう自分だけど、一生懸命子どもと気持ちを通わせたいという願いで書かれた実践記録だったからです。だから応えてやらなければと思ったのだけれども、それでも重かったです。

これが『ぶたのたね』という絵本を3歳児に読んだ実践事例でした。『ぶたのたね』というのは、ご存じの方もいるかもしれませんが、佐々木マキさんという人が書いた絵本で、面白い本です。ぶたを捕まえるオオカミがいるのですが、足が遅くていつも逃げられてしまいます。だからおなかですいて仕方がないオオカミさんに、キツネ博士がアドバイスをします。ぶたのたねを持ってきて、「これを育ててごらん。これを育てると、ちゃんとぶたの芽が出てきて、ぶたの木になって、ぶたの実がなってくる。このぶたの実が成熟したらほとんど落ちる。それを食べれば足の遅い君だってぶたが食べれるよ」と言うので、一生懸命ぶたのたねを植えるオオカミの話です。

『『そろそろ食べごろだ』とオオカミが見ているところ、『えーっそんなのないよ』と言いながら、それでもどこかにそんなたねがあるかもしれないと思っている様子。そんな子どもたちと公園に行ったときのことで』。ここまで読んだときに、いい先生だと僕は思ったのです。3歳児にこの絵本を選んだこと自体がすてきじゃないかと思いました。そして、3歳児が読んでいるときに「そんなのないよ」という声をちゃんと聞き取ったところ、新人なのにいい先生ではないかと僕は思いました。そしてさらにその子どもを公園に連れていく。そういう状況で公園に行ったら、起きることは大体想像できます。だから「結構この人、いい感じじゃない」と思って、この記録を期待して読んでいたのです。

その後具体的にこう書いてくれました。「予想どおりと言ってもいいぐらい、カオルという子どもが先生に語り掛けてきます。『先生、ぶたのたね、探してみよう』と言うのです。ルイという子が、「いいね、いいね」と言って二人で公園内を探索しています」。記録というのは、読んでみると面白いのです。先生がわざと書かなかったのかどうか知りませんが、この3行だけでちょっとショックを受けました。なぜか分かりますか。カオルは先生を誘ったのです。「先生、ぶたのたね、探してみよう」、ルイが「いいね、いいね」と乗ってきました。二人で公園内。先生、どうしたのですか。完全にスルーしているじゃないですか。何でここで一緒に探すとか、何も反応しなかったのか、それはないでしょうと思いました。何か言ったのではないかと思いましたが。

「カオルが『あったよ』と言いながら持ってきたのは、茶色い木の実でした。ルイが『本当だね。ぶたのたねだね』と二人で会話しています」。ここでも先生の言葉が出てこないのです。「二人のやりとりを見ていたリクトが加わり、三人での活動が始まる」。最初は、僕は先生は本当は何かしゃべったのだけれども、書かなかっただけで、子どもの声だけを書いたのだと思っていたのですが、本当にしゃべっていなかったみたいです。リクトが加わって、三人での活動が始まる。あなたも入って四人でやりなさいと思ったのですが。

リクトが「ちょっと植えてみよう」と、それを植えるはじめたのです。そうしたら、砂をかけたところで、「水をやらなきゃ」と思ったのだけれども、一人だけ暇そうなのが、ぼーっと立っている先生です。それを見つけて「お水あげたい。先生、お水」とリクトが言いながら、公園の水道の方を見ました。そうしたら、先生は初めてしゃべりました。「お水は公園のだから使えないな」。何で、たねに水をやるぐらいいいだろうと思ったのですが、「このまま水遊びになっても困ると思い、子どもの要求を否定してしまった」。ならないでしょう。ここまで一生懸命捕まえて取ってきた種を植えて、水をやらなきゃと言って、「先生、お水」と言って、その種にやるだけの水をやって、そこから水遊びに発展する、それはないでしょう、何で水を使うことを許可しなかったのだろうかと思いました。

「保育者に水は使えないと言われ、少し考えたリクトはたねを植えたところにつばを吐いて、水をやろうとする。それを見ていたカオルとルイも同じようにつばを吐いた。『それは汚いからやめようよ』」。これが2回目の言葉でした。



この記録はこれで終わりです。そして園に帰ったという記録でした。

反省文が書いてありました。「記録を書きながら、私も一緒にその世界に入り込み、『そうだね、お水をちょっとあげてみようか』と子どもたちと一緒に楽しめていたら、活動がもっと広がって、面白かったのかなと考えた」。そのとおりです。でもね、3時間後に考えることではないでしょう。その場で普通考えることでしょう。

どうしてこういう実践になってしまったのか、なってしまったのをどうして書いたのかなと僕は思って、一言聞いたのです。「なぜそこで言わなかったのですか」と言ったら、ちょっと予想外の答えが返ってきました。この先生は僕にこう言いました。「だって、先生、本当にぶたのたねってないですよ」。それは僕も知っています。本当にぶたのたねがあったら大変です。「一緒に探してみようとか、一緒にだまされたつもりでやってみようとか、そんなことを思いませんでしたか」と言ったら、「保育者がうそを教えていいのですか」と真面目に言ってくるのです。この真面目に聞いてきた言葉にちょっとショックを受けたのです。

つまり、3歳、4歳のころに、現実に存在しないものが存在するように思い、それを信じ切って生きるという、ファンタジーという世界の入り口に子どもたちは立ってくるのだけれども、2歳までは現実のものしか見えなかった子どもたちが、非現実、虚構と想像の世界をつくり出し、その想像の世界を広げていくこの時期に、「本当にこんなことができるかもしれない。こんなことがあったらすごいな」という感覚で普通は大きくなるのです。だから、ぶたのたね、あったらいいなという感じで探す。このリアルな気持ちは3歳児の普通の姿なのですが、ここが分からなかったみたいです。3歳の子が何であんな真面目な顔をして探してきて、「あったよ」と誇らしげに言うのか。それは違うでしょうと思いつつ聞いてみると、「それを本当のぶたのたねだという顔をして持ってくるこの子が、何を考えているのか分からず、自分でどう対応していいか分からないうちに、リクトが植えだしたから、植えてどうするつもりなのかと思っていたら、水と言われて、その水は使えないと言って、つばを吐く、それはやめようよと禁止することだけは言えるのだけれども、この子たちの思いにどう向き合うことが保育者の仕事なのか、私には分かりません。まさか一緒に探したりしませんよね」と聞くから、「いや、一緒に探してもいいのではないですか」



と言いました。

僕は思いました。なぜこうになってしまうのか。それは、だんだん聞いているうちに分かりました。もう一つ聞いたのです。「あなただって、小さいころ、サンタクロースが来たらいいなと思って、サンタクロースを信じたりしたでしょう」と言ったら、「うちはサンタは来ませんでした」と言うのです。そういう世界と無縁で生きた人が大人になって、保育者になってしまった。「そういうあなたでも、子どもたちと一緒に生きること、子どもと対話する、子どもと気持ちを通わせる力を学んでいけるといいですね」と言いました。なぜ3歳、4歳で、現実に存在しないものを信じる力が育つのか。そういうことを話したのだけれども、理屈で分かってても体が分からないだろうなと思いました。ドキドキしながら想像する時間を省略して生きた人が保育をすると、3歳、4歳のあの世界と響き合うことは難しいのでしょうか。それでもこの先生がその感覚を学び直してくれないと、先生も苦しいだろうけど、子どもも苦しいだろうと思いました。だから子どもたちは先生にあまり期待していないのです。もう無視して勝手に生きているわけです。

皆さんだったらもう分かるでしょう。例えば「あったよ」と茶色い木の実を持ってきて、「本当だね、ぶたのたねだね」とルイ君が言ったとき、皆さんならどう言いますか。そこで「本当だ、よく取ってきたね」なんて言うと面白くないですよ。「ルイ君、ちょっと見せてごらん。これは違うね。これよりもちょっと大きいやつだったね」と言うと、「本当?」と言いながら探してくる。「これ?」「駄目駄目、これは茶色過ぎ。もう少し黒いやつ」なんて言って、ぶたのたねに対する思いを深めさせるために、4回ぐらい取ってこさせて、「うん、これだね」と言います。「じゃあ植えようか」と言ったら、「こんなところに植えてどうするの。ここに植えたら誰がどうやって掘り出すか分からないじゃない。大事な種なんだから園に持って帰って、そういえばこの前アサガオを植えた隣がちょっと空いているから、あそこを秘密の畑にして植えてみようか。楽しみだね」「そうだね! じゃあみんなに」「みんなに言っちゃ駄目。秘密、秘密。これは四人の秘密にしましょう」「分かった。秘密だよね」、すぐにしゃべるのだけど、そう言いながら園に帰っていくわけです。

そうして「秘密のたね植えしよう」なんて言ったら、こういうときに子どもはすごくドキドキしながら真剣にやるわけです。「幹が出るまで秘密だよ」と





やるわけです。そうしたら、そういうところに1週間もしたら何か芽が出てくるのです。何かよく分からないけれども雑草でしょうね。雑草が出てきたときに子どもが「先生、出てきた、出てきた」と言うから、「何が」「ぶたの芽」「本当だね。大事にしようね」なんて水をやっていると、園長が抜いてなくなったりしてしまうのです。ドラマじゃないですか。

そうやって子どもと一緒にドキドキしながら、不思議の世界を楽しんでいくということをやりたいくなるわけです。子どもの思いに共鳴し、子どもの思いに響き合う感覚を持っている人だったら、やはりそういうふうには実践は展開します。そして子どもたちが「残念」と言ったら、「残念だね。本当にどこのあるかね、ぶたのたね」と言って、結局はなかなか出会えませんがということで終わっていいわけです。サンタクロースも本物が園に来て出会ってしまうと興奮めですからね。いそうでいないサンタクロース、これがファンタジーのいいところです。見たに違いないということで、「カッパがそこにいた」と言うのだけれども、行くと出会えない。だからいそうな気がするのです。おぼけだって本当は出会ったことはないのだけれども、「あそこにいた」と言ってみんなが行って、「見たね」「見たね」なんて言いながら、うわさ話が広がっていくのです。

現実には存在しないもの。これを信じる力は実は人間にとってすごく大事な力なのです。ごっこ遊びの世界から始まって、その虚構を信じる力、想像とファンタジーの力。それはなぜ大事なのか。そのころから人間は、あるべき世界、人間の願望の世界、もっと言うと理想の世界を頭の中につくりはじめます。現実に体験するリアルな世界に対して、虚構世界は、私たちが頭の中につくり出した一つの物語なのです。だから、理想の国とか、理想の人間関係とか、そういうものを頭に描くことができるのです。

平和という概念だって、実は頭の中につくった抽象的な概念です。この地球の中で平和を体験したことなんていまだ一度もないわけです。世界中はずっと戦争をし続けています。それがリアルの現実なのだけれども、そのリアルな現実に対して、戦争しない、みんなが分かり合う、そういう社会がくれたらいいねというのを頭の中で描くから、私たちはこの社会をどこに向けて発展させていこうということを頭に描きながら生きていくことができるのです。人間は裏切られたり、人に嫌なことを言われたりする現実の中で落ち込んだりするけれども、でも、人と人はいつか分かり合えるはずという自分の中の哲学を持つ

ことによって、そういうことでめげない自分をつくっていくことができる。想像と虚構の世界というのは、人間が人間である上で、すごく大事な力になってくるのです。現実には体験したリアルなことだけで人は生きているのではないのです。頭の中につくった物語の世界をもう一つ大事なものとして人は生きていくのです。

それをつくり出していくのが、3～4歳の時期なのです。現実のリアルな感覚と、あるべき自分、この二つの世界を持ちながら、そこをつなげて生きる。その時期にぶたのたねを信じ合うような実践は意味があるのです。これができない人はやはり3歳児の担任は辛いだろうと思いました。これは特殊な人でした。まさかこういう人が保育をする仕事に入ってきたとは思っていなかったのですが、親もこういう人がいるわけですから、保育者だって、こういう人が入ってきたっていいわけです。この人をちゃんと育てられるだけの園でなければいけないということなのだろうけど、今の保育園はこういう人を抱え込んで育てるだけの余裕がなかなかないわけです。あなたの世話までしている暇はありませんということで、即戦力になってほしいという状況です。本当は、でもこういう人が子どもと一緒に生きているうちに変わっていく、そういうドラマを園の中でもつくれる余裕が欲しいです。でもこの先生、3歳児がごっこ遊びの世界にはまり込む姿にあぜんとして、「どうしていいか分かりません」と言うわけです。私たちからしたらちょっと子どもと響き合わない体。この人はこれをどういうふうに変えていくのだろうと思うと、時間がかかる仕事だなと思っていました。

6. 保育者の専門性を構成する概念的知性と直感的応答力

保育者が子どもと対話的で応答的な関係をつくるというとき、保育者の専門性には、概念的知性と直観的応答力という二重の構造が常に存在しています。概念的知性というのは、保育の理論のことを指しています。あるいは哲学、あるいは保育と保育士の制度的枠組みというものを指しています。つまり、皆さんが今までいろいろな形で勉強してきた、3歳児にはこんな特徴がありとか、保育の中で大事にしなければいけないことはこういうこととか、言葉にされ、テストしたらちゃんと答えが書ける保育の理論全体を概念的知性と言います。皆さんはそれを勉強して、それがちゃんとあるということで、保育士としての



資格を持ちながら、幼稚園教諭としての資格を持ちながら生きているわけです。プロがプロであるゆえん、素人でないということは、保育に必要な知識をちゃんと持っているということなのです。

でも、知識が豊かだったら子どもが幸せになるかと言ったらそうではないということです。確かに豊かな知識を持っている人が、いい実践をして、毎日の保育が面白く豊かに展開されるかというところではないのです。保育者にはもう一つ、保育者としての専門性を構成する力があるのです。直観的応答力、身体的知性です。体で学んだ自分の勘とコツの世界があるわけです。30歳の人は、30年生きてきた中で、虫が面白いなと思って小さな虫をいっぱい集めることが好きだったら、子どもたちが集めている世界に対しても、「ナナちゃん、捕まえたね。先生もこれ好きだったの」と共感的に見えます。でも、子どもがヤモリを捕まえて、「先生」と言ったら「いや、持っていて」と嫌な人はいるでしょうね。カエルなども楽しいからいっぱい捕まえてくるのですが、「私は触れない。部屋の中に入れてないで。外でならいいけれど」と言うでしょうね。

この感覚の違いが身体的知性です。頭の中では、いろいろな動物に興味を持つことは大事だ、だから大事にしている子どもを私も大事にしなければと思っているのですが、私の体が拒否するということはありますよね。これが実は子どもと関わる時に重要な力になるのです。「保育観」は保育についての見方ですが、「保育勘」でしょうね。この二つの「保育観（勘）」が存在して、保育勘の方が保育実践においては決定的に重要な意味があります。知識はほとんど使わないですが、勘は毎日使っています。ここでほとんどのエネルギーを費やしています。皆さん、概念的知性についていろいろ勉強したことを使いながら保育していないでしょう。目の前に子どもがいて、「うーん、3歳児にとってこれはこういう意味だ」と考えている暇はないです。考えているうちに子どもはなくなってしまいますから、考える前に行動しなくてはいけないのです。

7. 直観的応答力が保育の質の差をつくり出す

つまり、子どもの要求や思いと向き合っているのは、この直観的応答力で、ここで実践をつくっているのです。だから、この実践を積み重ねていくことが、私たちの保育実践の質をつくっているのです。だから、勉強はしなくてはいけませんし、保育所保育指針がどういうことを大事だと言っているのかも勉強し

なければいけません。でも勉強したら子どもとの関係が変わるかという、そう簡単ではないのです。ここの精度を高めなければいけない。自分の子どもの声を聴く、応答力・対話力のレベルを高めていかない限り、子どもの幸せはつくっていけないのです。

ところがそれが難しいのですよね。先ほどのぶたのたねの先生は、本当に苦勞しながら子どもの気持ちに応答する自分をつくろうとするけれど、子どもの気持ちに響かない、共感しないのだから、まず子どもには否定的な言葉でしか返せない。そういう中で、子どもとの関係は最悪になっていく。子どもをかわいとも思えない。そうなるとう負のスパイラスに入ってしまいます。そこから学ぼうとしたら、子どもとのずれをちゃんと自分の実践の意味として意味付ける、そして自分の直感的応答力のレベルを変えていく努力をしなければいけないのだけれども、簡単ではないなと思いました。

この構造は宿命のようにあるのです。先ほどのぶたのたねの先生が特別に大変かと言ったら、そうではないのです。経験を積んだすぐ力のある先生の実践記録を読んでもやはり気になることがあります。経験を積み、直感的応答力の精度が高まるかという、必ずしもそうではありません。いい経験を積んだ人はいいです。悪い経験を積んでいくと、これもまた癖のあるタイプの子どもしか大事にしない体になってしまうのです。だから保育経験が高ければ、子どもの思いにちゃんと応えられるかという、そうではありません。分かりますね。

一番大事なのは、最初に就職して3年間の経験だと僕は思います。公立の先生たちはいろいろなところへ転勤するからいろいろな園を知ります。それでも最初の3年間は自分の保育者としての体を形成します。そこでどんな経験をするかです。その園が管理的な保育を当たり前にしていたら、そういう体を身に付けてしまうのです。その園が放任的に保育をしていたら、うまくいかないけれど、とにかく「子どもの選んだことですから」と言いながら、何か混乱した保育を続けるという保育者になっていくのです。質の高い経験を保育者経験の3年間でやった人は幸せだと思いますが、なかなかいないでしょうね。

僕は記録の本を書いているときに、これも横浜の先生なのですが、いい先生と出会いました。素直な20年選手の先生でした。20年経験してすぐ実践力があるのだけれども、記録も素直に書いてくれる大好きな先生なのです。



この20年の豊かな実践経験を持った先生がこう書いています。「ごっこ遊びに興じる2歳児クラスの子どもたち。お弁当やジュースをバッグに詰めて、長座布団ごとに仲良く座ってままと遊びを始めたときのこと」。このクラス、なぜか二人1組で座れる長座布団が幾つかありまして、そこに座ってのままと遊びがはやっている11月ぐらいの実践でした。2歳児クラスの11月ですから、3歳の初めのころの実践と考えてくださっていいです。子どもたちの間にいろいろなことが起きます。

「長座布団一つに二人ずつ仲良く座ってままとが始まったが、ヨシコちゃんという女の子の座布団と一緒に座ろうとしたユズちゃんに対して、いきなりヨシコちゃんが拒否の言葉」。つまり、二人1組で座る座布団をヨシコちゃんは一人で独占しているわけです。だからユズちゃんが後から来て、「あー座るところがない」と言っていたら、ヨシコちゃんのところが空いているじゃないかということで、ヨシコちゃんのところへ当然のように座ろうとしたときです。ヨシコちゃんはユズちゃんを拒否する言葉、「ここヨシコちゃんのところだから入らないで」と言ったのです。ユズちゃんは、「だってユズちゃん座るところないもん」と言います。

この場面で皆さんはどうしますか。ヨシコちゃんとユズちゃん、二人の声を同時に大事にしたいのですが、ヨシコちゃん派とユズちゃん派で保育者が分かれるのです。ヨシコちゃんの方が好きな人が時々いて、ヨシコちゃん憎しの先生もいます。「こうやってすぐに友達を拒否するんだから、あんたは」「そうやってわがままを言っているから、あんたはみんなに嫌われちゃうんだよ」と気楽に言う人が時々います。思っても言わないでください。こういう人はヨシコちゃんが嫌いです。

ユズちゃんという子は、大体こういうときに最後までうろうろしながら座るところが決められない。みんなが遊びだしてから、うろうろしながら「ここ」と座ろうとする。最後にやってくるタイプの子で、このぐじゅぐじゅしている姿が許せないという人も時々いるのです。「あんた早く座りたいなら先に座りなさいよ。いつも最後に来て、泣いて、そうやって生きていたら人生ずっとそうやって後から追い掛けることになるんだよ。もっと頑張り」と見る人もいるのです。そういう人からしたら、ヨシコちゃんみたいな子はたくましいのです。「あんた、自分で決めて、これをやりたいという自己主張が強いわ。さすがヨ

シコ。2歳児の自己主張の塊。あんた将来が有望」と見る人もいるのです。

この感覚の違いで保育が変わるのです。この先生の心の声は、「ああ、また始まった。一体ユズちゃんどうするかな」です。もう正直でしょう。「ああ、また始まった」というのは、もうヨシコ憎しですね（笑）。そこから実践が始まるのです。「ユズちゃんどうするかな」。ユズには優しいでしょう。ユズちゃんには優しい気持ちで対応し、ヨシコにはいら立った気持ちで対応する。これが先生の応答に出てくるのです。「ヨシコに拒否され、仕方ないと言った感じで、諦めて別の座布団に入れてもらおうとするユズだが、どこの座布団からも『もう入れないよう』と断られてしまう」。先生が「ユズちゃん、困っているよ！ ヨシコちゃん、入れてあげたら？」と言ったら、「だってー。ヨシコちゃんのお布団、狭くなっちゃうもん」。先生の心の声がいいですね。「全くー。何だかんだと理由をつけて、結局入れてあげないんだから」。そう思った途端に先生の声はこういうふうに出てきました。「あっそう、じゃあいいです！ ユズちゃん、おいで！」。ヨシコを切り捨てましたね（笑）。ユズを守る作戦に出ました。「長座布団がないので、代わりに大きめのマットを敷いてユズちゃんを誘った」。あるなら最初から出してやってほしかった（笑）。「ユズちゃんは『ありがとう！』と言って、うれしそうに私の用意したマットに座る」。

そして、大きいマットにユズちゃんと先生が座ったら、他の子たちも魅力を感じて集まってきたのです。だからその大きなマットにみんなが集まって、みんなでごっこ遊びが始まったのです。ここはこの先生いい実践をしています。リョウコは「リョウコねえ、お仕事行ってくるね」。アズサ・ユズは「学校行ってくるね」。先生が「じゃあ、ご飯つくって待っているね」と言ったら、子どもたちは「はーい、分かった」。しばらくすると「ただいま」と子どもたち。そうなのです。2歳児は仕事しないで、勉強しないで帰ってきますから、すぐ帰ってくるのです。

「そしてみんなで大きいマットで寝て、また翌日の活動が始まる。ついたてを用意して、今度はお風呂に見立てて、準備しておく。子どもたちは『ただいま』と帰ってくると、早速お風呂に入り、シャワーをしたりと、お風呂ごっこを楽しんでいます」。このごっこの展開過程は2歳の担任としてすてきな実践ではないですか。これはやはりベテランですね。急にお風呂をつくっている。これがいいです。子どもの遊びは盛り上がるのです。



でもそこで事件が起こりました。それまで一人で遊んでいたヨシコちゃんが、少しずつ自分の長座布団を大きいマットに近づけてきていたのです。けなげに近づいてくるのだから、受け入れてあげればいいのに、先生は「ユズちゃんを入れてあげなかったことを少しは感じて、今まで一人で遊んでいたけど、楽しそうだから一緒に遊びたくなっただな」と書いています。そうですよ。ユズちゃんを拒否したけれど、ヨシコちゃんも入れてみんなで遊ぶチャンスなのですけれども、「またみんなが出掛けていなくなると、ヨシコがさらに近づいてきて、「何か、マットがヨシコちゃんの座布団にのっかってきた」と言うのです。

実は本を書いたときには書きませんでした、実際の記録にはこの下に1行、「と言いがかりをつけてきた」と書いてあったのです。さすがにこれは本で省略しましたが、2歳児は言いがかりをつけないでしょうと思いましたが、そういうふうに言われた先生の言葉は、「ええっ！ お風呂は動いてないよ」と、冷たいものです。「だって、ここにくっついちゃったもん」「それはヨシコちゃんがかくついてきたからでしょう」「違う、ヨシコちゃん、何もしてないもん！」「そお？ ヨシコちゃん、さっきまであっちにいなかったっけ」。相手は2歳児ですからそんなに攻撃的になってほしくないのですが。「だってさ」と繰り返しながら泣きはじめる。心の声「まただ。すぐ泣いちゃうんだから」。あなたが泣かせたのでしょうか（笑）。

そうしたら先生はさらに「どうしてヨシコちゃんが泣くの」と言います。「だって、ヨシコちゃん、お風呂入りたかったんだもん」「じゃあ、入れてって言えば良かったんでしょ」と言うと、その様子を近くで見ていたリョウコちゃんが、「ヨシコちゃん、入っていいよ」と言ってくれました。するとユズちゃんまでが「いいよ」と声を掛けてくれたのです。「良かったね、ヨシコちゃんは入れてあげなかったのに、ユズちゃんは入れてくれたよ」と言いました。ヨシコちゃんは「ありがとう」と言って、まるで何事もなかったように、お風呂に入って一緒に遊びはじめた。

最後はいいのですが、この嫌味を言う必要はありますか（笑）。「ヨシコちゃんを入れてあげなかったのに」。こういうのが実践のリアルな場面では結構出てくるのです。私たちは意識してしゃべったりするのではなくて、無意識のうちに子どもとの応答関係をつくっていくのです。いつもいつも友達に対してわがままざんまいのヨシコだから、こんな場面で、「急に入りたいなんて言っても、

いつものことを反省してごらん下さい」とつい言いたくなるわけです。たった2年しか生きていないヨシコちゃんにここまで冷たくする必要はないのです。

でも、こういう実践記録を書いてくださっていて、僕はこの先生をいい先生だと思いました。これはこれでこの先生はベテランですから、あのヨシコはこういう中でもたくましく大きくなるでしょうと言うのだけれども、ここから学ぶことはいっぱいあります。皆さんだったらこれを冷静に読んでみると、どこをどうすればいいか分かると思います。ヨシコちゃんは2歳児ですが、一体何がヨシコちゃんの今の育ちの課題なのか、それが分かると、ここでの応答関係が変わってくるはずなのです。2歳児はどういう時期なのか、こうやって保育していると、ついつい忘れてしまうのです。

一番大事な子どもとの応答的・対話的な関係をつくっていくために、皆さんが頭の中に置いておくことと便利だなということがあります。子どもたちの声の発達には、心の育ちに対応して、ある法則性があるということを知っていると、ヨシコちゃんに何をすることが私たちの仕事なのかという大きな意味での見通しが持てると考えています。

2歳で芽生え、3歳で形成される心の形。私たちの心というのは、赤ちゃんからちゃんをつくられているわけではないのです。最初に言った子どもの声の二重性も、赤ちゃんの素朴な声からだんだん複雑な声になります。心の育ちに対応して、声のレベルが変わってくるのです。特に2歳児で芽生え、3歳で心の形が形成される。そう考えたら2歳の時期に、私たちがやらなければいけない保育の責任はちゃんとあるのです。それを知っていると、知っていないのとで、子どもの声への応答の仕方、自分の勘とコツを修正する道が分かってきます。勘とコツだけだったらもう宿命みたいなものになるのだけれども、それをいつも見直していく、振り返らせてくれる保育の大事な視点というものがあるのです。それは目標と言ってもいいです。最初に言った10の姿ではなくて、もっとシンプルな心の育ちで考えたらいいのではないかと思います。

8. 保育者の直感的応答力の精度を高める三つの道

8-1. 自己主張を受け止めて切り返す

これから、心の育ちがどのようにつくられていくかということを簡単に紹介



します。人間の心は、赤ちゃんのころからちゃんとした心の形があるわけでは
ありません。知らないうちに人間の心はつくられて大きくなっていくのだけれ
ども、4歳児と1歳児では全然違います。子どもの心は二重自我が形成される
ことでつくられると考えられています。

人間の心の芽は、まず1歳半～3歳、2歳を中心とした時期に自我という形
で誕生してきます。自我というのは自己主張と言い換えてもいいです。自己主
張で、他の子が持っているおもちゃを、「僕の僕の」と取りに行きます。他の
子がやっていると、「僕も僕も」とやりたがります。おいしい給食が出るのに、
嫌いなニンジンがあると、「これは食べられるよね」と言ったら、「いや」と拒
絶します。「いや」「僕の僕の」「僕も僕も」という自己主張の世界が、1歳半
ぐらいに子どもの中に出てくると言われています。これを自我の誕生と言いま
す。

「赤ちゃんだって要求がありますよ」と皆さんは思います。そうです。赤ちゃん
も要求を持ちながら生きています。生後7～8か月の子どもがハイハイを始
めるときに、寝返りを生後6～7か月でやるときに、どうしても向こうに行き
たい、でも体が動かない。そういうときに彼らは「うーん」と力を入れるけれ
ども、手だけでは駄目だと思うと、腰の辺に力が入ってくるのが分かって、
そしたらここにもっと力を入れてみようと思ってやったら、ぶるんと回るわけ
です。そして、回って寝返りができたら、手と足を使って、あそこまで行って
みようと思って、その要求で行けるようになるのです。ハイハイができたら、
面白いと思うところへ積極的に行っては、それを口の中に入れ、確かめてみよ
うとする。そういう要求に基づいて生きている。だから子どもの自己主張とい
うのは、赤ちゃんにだってあるのです。

赤ちゃんにもこうしたい、ああしたい、あれが欲しいという願いはあるし、
給食が嫌なときにはべっと吐き出します。そういうことが要求としてあるので
すけれども、自我が誕生するというのは、自分はこうしたいのだという要求・
願いを、言葉と体の両方で、外の世界に対してきちんと表現するということ
です。それを自我というのです。要求を体で表現するしかなかった彼らが、言葉
と体の両方を使って、自分の思いを外に表現する。これを自己主張というので
す。言葉で自己主張する力は1歳半ばに子どもの中に育ち、そして自己主張し
た自分にこだわって生きる、それを1～2歳児の自我の拡大と言います。

言葉で要求するということは、言葉で要求した自分にこだわり、その要求が実現するまで要求したことに対してこだわり続けるということです。だから「これが欲しい」と言って、「駄目だよ」と言われたら、もうそれが頭の中に入ってしまった、「やー」とだだこねをするわけです。このだだこねが強くなっていくのも、言葉で要求したことが拒否されたり、実現しなかったりすると、それが手に入るまで自分の要求をさまざまな形で表現しようとするからです。言葉というのは要求の定位です。今まで漠然と要求があったのを、「これです」というふうに、ちゃんと具体的に外の世界に位置を定めて表現するわけです。その世界に対するこだわりが育つ。これが1～2歳児の姿です。

人間の心というのは、最初にこうしたい、これが欲しい、あそこへ行きたい、これは嫌だという自己主張から始まっていくのです。だから1歳の後半や2歳児は自己主張の塊みたいなことになっているわけです。集団保育には、こういう自己主張の塊と自己主張の塊が存在するから一筋縄ではいかないのです。子どもが自己主張することは成長の証です。この時期に保育者が、心が「こうしたい」しかない子どもにやらなければいけないことは、「今までは体で泣くしかなかったあなたが、こうしたいとちゃんと言葉で表現できるようになったのだね」と、自己主張する自我の世界を受け止めて、切り返すことです。大原則はこれに尽きるのです。

他の子が持っているおもちゃを「僕の」と無理やり取りにいきます。取ったら、誇らしげに取ったおもちゃで遊びはじめます。相手は泣いています。泣いていても自分が使いたいおもちゃが手に入って、この子は喜んでいるのです。そして「僕の」と取りに行く自己主張を成長の証として受け止めてやらないといけません。でも皆さん、受け止めるってどうしますか。向こうのおもちゃを無理やり取ってきて、「僕の」と言いながら遊んでいる子どもに、「うーんヨシオ君、よく取ってきたね」とは、まさか言わないですね。「よく取ってきたね」と受け止めると強盗の薦めですから、それはしないわけです。でも「何で取っちゃったの、泣いているじゃない」と、この自己主張を頭ごなしに否定することも間違いでしょう。

ではどうすることが自己主張を受け止めることか。子どもの自己主張の中には、保育者が人間として受け止めることができる部分とできない部分があるわけです。その人間として受け止めることができるあなたの自己主張を受け止め



でやるということですよ。無理やり取ってきて、「僕の」と遊んでいる子どもを、「よく取ってきたね」とまるごと受け止めてはいけません。私はあなたの無理やり取ったという行為は受け止めることができません、でもそうまでしてあなたが遊びたいという気持ちは受け止めることができますよということがあります。「取った行為は受け止めませんけれども、それを使って遊びたいあなたの気持ちはよく分かりますよ」と、その部分だけを受け止めてやればいいのです。

だから「僕の」と取ってきたら、「ああ、ヨシオ君、このおもちゃで遊びたかったんだ」と言ってやると、「うん、これがいいの」と言います。自分の思いがきちんと受け止められたら、受け止められる心地良さの中を子どもは生きるわけです。そうしたら2歳児というのは大体得意げに、えらそうに、誇らしげに「僕の」と言うのです。えらそうに威張っているときは心に余裕があるわけです。その余裕があるところに、「でもね」という言葉を返していくわけです。「ミチヨちゃんが先に使っていたから、こういうときは『貸して』と言おうか」と言ったら、「貸してね」という社会的知性を子どもが身に付けていくのです。

自己主張を受け止めて、「でもね」という言葉で切り返ししながら、社会的知性、社会のルールはこういうときにこうするのだよ、順番ということがあるのだよという世界へ連れて行ってやる。受け止められた心地良さをベースに、この社会が持っているルールの世界へと子どもをいざなっていく。1～2歳の言葉は受け止めて切り返すという関わり方をするることによって、あなたの自己主張はあなたが出す。あなたの思いは分かるけれども、こういう社会的知性を持つとますますきだよと受け止めていざなっていく。これが子どもの言葉に向き合う、1～2歳児の担任の使命なのです。それを繰り返し、繰り返し、根気良くやることによって、1～2歳児は、自分の中にある自我の世界だけではなく、これを第二の自我と心理学者のバロンは言うのだけれども、その世界を育てることが私たちの仕事なのです。

これは子どもの声の中に、自分の要求を表現する強い声と、大人や社会が持っている価値を自分の言葉として取り込んでいく、二つ目の声、新しい声を獲得するということになるでしょう。だから、2歳児は自己主張の塊みたいに見えるけれども、大人の関わり方次第で、心地良く社会的知性を自分の中に日替わりで増やしていく、そこがかわいいではないですか。今まで無理やり取ることしか能がなかった子どもが、「順番だよね」なんて言うと、抱きしめたいぐら

いかわいいです。そういう言葉が日替わりで増えていくのです。私たちが、子どもが出す声を受け止めながら、新しい社会の声へ連れていくから、二つ目の声を誇らしげに語る2歳児が育ってくるのです。そこを豊かに育てて、新しい声を子どものものにしていくために、保育士さんの仕事があります。

そう考えたら、先ほどのヨシコちゃんは自己主張の塊で、2歳児らしく育っているのです。その思いを受け止めながら、新しい声の世界へ連れていくということが私たちの仕事です。このことを知っておくと、2歳の担任はもう少し保育の道が分かってくると思います。勘とコツだと先ほどの先生で終わってしまうのだけれども、そこに知性が加わると、少し保育が豊かになります。

8-2. 歌、絵本

実は受け止めて切り返すというだけではなく、あと二つの道を知っていると、2歳の保育でやることは受け止めて切り返すという一辺倒の保育ではなくなります。二つ目の道は歌、絵本の世界です。生後10か月ぐらいから、子どもたちと楽しくできるような遊び歌、童歌、絵本など歌の世界があります。大人との共感的な関係の中で、子どもたちが言葉の塊としての歌、言葉の塊としての絵本の価値を自分の中に取り込んでくるのです。だから、絵本と一緒に読み、歌と一緒にうたう中で、社会の価値を身に付けていくのです。ただし、1歳児、2歳児は、歌もうたっても歌の意味がはっきり分かっているわけではありません。絵本を読んでも、絵本のテーマがはっきり分かるわけではありません。ただ、大人と一緒に心地良い感覚で言葉の塊を身に付けていく。何かこの言葉の中に大切なものがあるみたいだということを無意識のうちに子どもの中に学ばせていく。だから私たちは共感的な知性を育てるために、歌や絵本や紙芝居の世界につなげていきます。

1～2歳児が喜ぶ絵本は大体限られています。ストーリー性のある本よりも、繰り返し繰り返し言葉が面白い絵本の方が好きです。2歳児が好きな絵本に、『もこもこ』という本があります。谷川俊太郎さん作です。あれ、好きですね。不思議ですよ。変なやつがもこっと出てきて、もこもこ、ぱく、によきというだけのどうでもいいような本なのですが、2歳の子はこれが好きですね。

ある園で、お聞きした話です。ある園で、お昼寝の後に誰かがシーツを汚したので洗って、干していたのです。それが乾いたというので、3時ごろにその



シートを取り込んで、たたもうと思ったら、他の先生が呼んだから、部屋にシートを置いたままよそへ行ってしまったのです。そうすると、帰ってきたらびっくり、一人の男の子がその部屋にある白いシートを見つけて、中にもぐりこんで「もこもこ」とやったら、もう一人の子が来て、「ぱく」と抱きつくわけです。そして「によき」なんてやりながら、そのシートを使って、「もこもこもこ」ごっこがクラスの中ではやっていったのです。

ああいうのはイメージ絵本と言い、ストーリー絵本と違って、その絵本の中でいろいろなイメージを豊かにするのでしょう。彼らはそういう視覚的イメージあるいは音声イメージを毎日の生活でたくさん経験しているのかもしれない。『ノントン』という本が出たときに、いろいろ話題になりましたけれども、絵本業界で非常に批判されたのです。絵に品がない、漫画のような絵本を市場に送り出してしまったとか、それまでの絵本の美的な感覚を大事にしてきた人からは、ちょっと言葉もなんだしと言われたのです。

ところが、『ノントン』は小さな子どもを持つ親から圧倒的な支持を得ました。子どもが支持してしまったのです。あの絵本が持っている魅力は、意味ではなくて、あの言葉が持っている音楽性だったような気がします。童歌を真正面からやるのではなく、時代が変わってくる中で、「ノントン ノントン、ぶらんこのせて」「だめだめ これから、かたあしのみり するんだもん」。このやりとりが昔の「○○ちゃん、あーそぼ」という感覚と似ているのです。そして「1・2・3・4・5・6・7・8・9・10、おまけの おまけのきしゃぼっぽ、ぽーっとなったら かわりましょ！」というのだって、家で読むと各親でメロディーが違うわけです。勝手に音楽としてうたわないとやはり読めないの、家では恥ずかしくないからうたうわけです。うたう絵本なのです。

そうしたら何度も聞いているうちに、その音楽のような歌詞が自分の中に入ってくるのです。それは意味が何かは後から分かってくることで、そういうふうにして社会的知性というのは、音が先にありきなのです。自己主張は意味先にありきなのです。「言葉では言えないけど、こうしたいんだ」という意味の世界があるから、言葉より体が出るのです。言葉より手が出るのです。言葉より口が出るのです。だからすぐにかみついてしまったりします。説明している暇がないのです。

こちらは、体は落ち着いているのだけれども、言葉の塊を共有することを心

地良く思います。2種類別の言葉が子どもの中に形成されるのです。だから、絵本をしっかりと読むというはすごく大事なことです。歌を心地良くクラスの間仲間とうたうことはとても大事なことです。歌をうたいながら、手遊びをするというのは、1～2歳児にとってみたら、人と共感しながら、社会の価値を自分の中に取り込んでいく、自分たちの価値をつくっていく、大切な活動なのです。二つの別の言葉が子どもの中に育ってくるとしたら、絵本、紙芝居、歌、これは2歳児にとってとても大事な第二の自我を育てるの存在です。

8-3. ごっこ遊び

もう一つの道は、ごっこ遊びです。2～3歳のころに、見立て遊び、つもり遊び、そして3歳にごっこ遊びをやります。あのごっこの世界が第二の自我を育てていきます。このことがもう一つ重要なことです。世界中の子どもが3歳児になるとごっこ遊びをやります。2歳の子どもたちが見立て遊び、つもり遊びに乗じます。現実世界に対する要求とこだわりで生きている子どもたちが、頭の中で見立て遊び、ごっこ遊びをするというのはすごいですよね。例えば、泥を団子と見立てて「おいしいよ」とやるわけです。土でつくられているからおいしくもないのだけれども、「おいしいね」と食べられるのです。ただの泥の塊をおいしい団子に見立てることができる、そういうふうにして子どもは現実を非現実とつなげながら生きることができるのです。

さらに、ごっこ遊びというのが、なぜ第二の自我を育てる遊びになるのか。それは、今まで自分が経験したことを遊びで再現しているからではないのです。よく「体験したことを再現してごっこしているのですよね」「模倣ですね」という人がいるのですが、それは違うでしょうと言ったのが、ヴィゴツキーという心理学者でした。今までの心理学の中で、ごっこ遊びは現実に体験したことを再現する遊び、活動なのだと言われてきたが、私は違うと思うということを書いています。ではどういうふうが違うのか。彼はたくさんのごっこ遊びを集めて、分析して、こんなことを言っています。「私はたくさんごっこ遊びの事例を分析したが、不思議なことがその事例の中にはあった。例えば、本物の兄弟が兄弟ごっこをして遊んでいる事例だ」。本物の兄弟ですから兄弟をやっているのだからいいのですけれども、それが兄弟ごっこをやるのです。「姉は姉の役を妹は妹の役をして遊んでいたのがあった。そのとき、現実世界の兄弟は顔を合



わせればけんかし、おやつを配れば『お姉ちゃんが多い』と取り合っている子どもたちであった。ところが、ごっこの中の兄弟は、これ以上いい兄弟はいないという兄弟を演じているのである。おやつが一つ余れば、姉は『今日は小さな〇〇ちゃんにあげましょうね』とあげ、妹はもらったおやつを胸にしながら、『ありがとう、お姉さん』と、普段言ったことがないような言葉で語っているのである。

それは何なのか。現実の世界を再現したらけんかになるはずなのに、なぜそうならないのか。彼らは役を生きているのだ。姉という役を生きようとする、姉という役の背後にある社会的ルールを徹底して生きようとする。妹という役を生きようとする、妹らしくあるとはどういうことかという世界を、自分の知り得た知識を総動員しながら生きようとする。現実の再現ではないのだ。現実の世界から取り出した、その役が持っている社会的役割を徹底して生きようとするのだ。

お店屋さんごっこをする子は、すぐく人の興味を引くように、元気な声で「いらっしゃい、いらっしゃい」とやります。客の方は客の方でみんないい客を演じるのです。役の背後にあるルールを生きる。この時期の子どもたちが自ら進んでルールの世界を生きようとする。そんな活動が他にあるだろうかと書いてあります。ないと思います。

保育園ごっこをする保育園児の事例も書いてありましたが、これも面白いです。現実社会の中では保育者の言うことを聞かずに困っている子どもが、ちょっと下手な、絵本を読む保育者役の子どもに付き合っ、ちゃんと園児Aをやっているわけです。普段は聞いていないのに、何か知らないけどお山座りしてちゃんと聞いているわけです。保育園児がふらふらしたら、保育園児なのか何なのか分からなくなるでしょう。だから彼らは頭の中に知り得た保育園児とはこうあるべきなのだという、その世界を生きようとしているのです。

だから、自我の塊みたいなヨシコちゃんが先生の悩みの種だとしたら、けなげに「お風呂に入りたいんだもん」と言いながら近づいてくるこのヨシコちゃんに、上手にだまされてやればいいじゃないですか。それを何でああいうふうに叱ってしまうのかなと思いました。ごっこの世界に入りたいと言って自ら来た子どもを、あえて現実世界で説教してどうするのという感じです。みんなと一緒に社会的知性を共有していく世界を豊かにすることが今のヨシコの発達課

題なのです。知っていながら、自我の強いヨシコに腹が立って、「マットが私の座布団にのっかってきたの」と言ったときに、「えー、お風呂動いてないよ」と現実世界でやりとりするわけです。

「何かマットがのっかってきた」と言ったときに、「あれ、遊びたいの」と言うのも駄目ですね、現実世界だから。もう少し乗ってあげるといいでしょう。「あらら、不思議なことがあるもんですね。一緒になってしまいましたね」と言いながら、「ヨシコちゃんの座布団が一緒になるとおうちが広くなりました。ありがとうございます。みんな喜ぶと思います。じゃあ、こっちのマットへどうぞ」なんて言っているときに、みんなが帰って、「ただいま」と言ったら、「ヨシコちゃんのおうちが一緒になって、広いうちになりました」と言ったら、「ありがとう、ヨシコちゃん」と言いながら、遊びが一緒に始まります。「じゃあ行ってきまーす」と言ったら、ヨシコちゃんも「行ってきまーす」と言って、「ただいまー」という仲間に入れます。

そうやりながら、仲間と一緒にのおうちごっこを遊んでいくと、彼女は「この座布団がいい」というところでこだわって生きていた自分から、みんなと一緒に虚構世界で生きることの面白さを体で知るわけです。そういう経験を繰り返したヨシコちゃんは、次のとき、ユズちゃんが「ここに入れて」と言ったら、「いいよ、どうぞ。じゃあ一緒にこれしよう」というふうになります。

彼女は、自己主張する世界はもう私たちがやらなくても育っています。でも、みんなと一緒に社会的知性を共有していく世界が弱いのです。受け止めて切り返すというのが保育者の仕事だけれども、ごっこの世界を豊かにすることが、みんなと一緒に社会のルールを生きている、その心地良さを学ぶチャンスだったのです。それを先生の冷たい言葉でつぶしそうになっていたわけです。ヨシコちゃんの強い力で、何とかここに入れて良かったけれども、保育の中でせっかくのチャンスを自らが踏みにじってしまうということが、現実には存在します。

勘とコツというのは宿命のようにあって、その精度を高めなければいけないことは事実なのだけれども、勘とコツに縛られていたら、その勘とコツ、自分の経験がどんどん増幅して、ヨシコちゃんを受け止められない自分というのが、20年選手が30年選手になったらもっとかたくななものになってしまうのです。だからそういう自分を常に振り返っていき、新しい理論によってリードし



ていく。そういう知性が保育者には必要になってくるといことなのだと思
います。

10. 3歳、4歳児の保育のポイント

1～2歳児のころに心地良い第二の自我を育てることが、保育を豊かにする
上で、あるいは子どもの声を確かなものにする上で、第一に重要なところだ
と思います。でも、もう一つ大事なポイントがあるのです。そこを知ってほしい
のです。それが3～4歳です。

2歳のころに、みんなと一緒に社会的知性を共有していく世界が豊かになっ
た子どもは、3歳児になると、自己主張する自分もあるし、社会的知性もある、
二つの自我をきちんと持ち合わせた子どもになってくるのです。3歳は、2歳
と違い、こうしないと駄目だということをちゃんと知っています。こうしたい
という世界も2歳より強烈に持っています。この二つの世界を持ちながら、な
かなかこれがうまくつながりませんというのが、3歳児の発達の特徴なのです。
だから3歳児はもどかしい。そして3歳児は腹が立ちます。知っているのにや
らないのです。

2歳は第二の自我がないから、それを育ててやるのが私の仕事と思うと、優
しくなれるでしょう。ところが、3歳児は他の子には厳しいことを言うので
すが、自分には甘いのです。3歳児の発達の特徴は、自分には優しく、他人には
厳しいのです。第二の自我は、他人を見るときには冷静に出てくるのですが、
自分自身を見つめる目には3歳児はならないみたいなのです。だから、他の子
がわがままを言っているときに「あの子はちょっとわがまま」と言ったり、他
の子が上靴で外を走っているときに、「その靴で走ってはいけません」と言っ
たり、社会のルールを他人に押し付けるときには、すごく冷静に社会的知性は
機能するのだけれども、自分がわがままをやっているとき、めちゃくちゃやっ
ているときには、このルールの世界はいっこうに役に立たないのです。ここが
3歳児の難しさなのです。二つの世界がなかなかつながらない。そういう3歳
を受け止めながら、明日こそつながるといいねという関わりをしていると、実
は4歳半になるとこの二つがつながってくるのです。

これを自己内対話能力と言い、子どもの中に育つ三つ目の声です。自己主張
の声が第一の声としたら、社会的知性が第二の声。これをつなげる三つ目の声

が育つのが4歳児なのです。三つ目の声とは何なのか。実は声と言いながら声がないのです。この自己内対話能力は、この二つの自我をつなげる力で、内言と言ひ、思考する力なのです。考える言葉です。自分の中にあるさまざまな価値を一つにつなげるとき、人はべらべらしゃべりながら考えません。それは心の声でつなげていくのです。心が育つというのは、この内言が育つということです。

「僕はまだ砂場で遊びたい。でも今日はみんなで公園に行く」と約束したよね」と心で考えるのです。それは言葉にしたら今みたいになりますけれども、哲学者のように「でも」と考えていると進みません。瞬間的に「まだ遊びたい」「公園に行く」、ここがつながって、「じゃあ片付ける」という判断をするわけです。この二つをつなげる力は、しゃべっている言葉にはならないけれども、心の中で確実に育つのです。これが育つとき、4歳児は急に立派になります。

ですから、僕は思うのです。子どもの声を大切に保育をしようとするときに、鍵を握っているのは、1～2歳児の自己主張しかなないときに、新しい第二の自我の世界を丁寧な育てていくこと、もう一つは、3歳から4歳にかけて、特に4歳児の担任の仕事が大きいのですが、子どもの内なる声、内言をきちんと育てる保育をすることです。それをすれば、5歳児は自己内対話ができる子どもが集団を形成するのです。年長で保育が崩れることは考えられません。自己内対話ができる子どもたちが、みんなと価値あるものを一緒につくろうというふうに生きてくれるからです。そうなったら年長は楽です。

ところが、この20年ぐらい5歳の担任が悩んでいるのです。「うちの年長に2歳みたいな子がいます」とか「めちゃくちゃです」という子に振り回されて、年長の担任が苦しんでいます。年長の担任がここにおいて、自分のクラスがそうだったとしても自分を責めてはいけません。私の能力がないからこんなクラスになってしまったと思っはいけないのです。誰が悪いかわかりますね。まず悪いのは2歳の担任です。あれがさぼった。第二の自我を育てずに3歳に上げてしまったツケが5歳に表れるのです。もう一つさぼった人、4歳児の担任です。この4歳児の担任が全ての子どもの自己内対話する力を育てないで、年長に上げてしまったので、5歳の保育が苦しいのです。だから4歳児の担任をまず恨みましょう。そして2歳児の担任です。両方自分だったらもう仕方ありません。自分を責めてください。



11. 4歳児保育の重要性

4歳は保育の中で、本当にへそのように大事なところですよ。僕は4歳児保育の質を高めることが園の保育の質全体を高めることになると思います。でも、この4歳保育のイメージが今まで曖昧だったのです。そして4歳児に何をしなければいけないか。これが明確になっていなかったところがあります。この4歳児保育の質を高めると、園全体の保育が急速に変わると思います。

3歳が大変だということは昔から言われていました。5歳が期待を集めるのは事実です。年長ほどすごくはないし、3歳ほど大変ではない4歳が穴場です。保育のポイントもよく分からず、保育士さんもこう言ってはなんだけれども、あまり期待しない人を配置することが多かったのです。でも、4歳は本当に重要です。この4歳の時期に、自己内対話能力が子どものものになるからです。

そしてもう一つ4歳児が大事な理由は、4歳児は間が分かってくるということです。三つの間が分かってきます。一つ目はものどもの間、事象と事象の間です。そこにどんな関係があるかが分かるから、論理がつくれます。4歳児は非常に理屈っぽいのです。「○○だから」というふうに、その根拠も「だから」でつなげようとしています。「つまり」と物事をまとめようとしています。そうやってものどもの、事と事の間に関係があるかということをお話するので、すごく賢くなります。4歳児の賢い言葉を聞き出すと、「4歳だな、あんた」となります。どれだけ論理が子どもの中に形成されているかに視点を置いて4歳児の保育を考えると、内言が育つときは理屈が育つときなのです。その理屈に耳を傾けてみてください。

二つ目は自分と他者の間です。人間関係、これが4歳の面白さと苦しさです。分かりますね。絵を描いていても、4歳児は急に「描けない」という子が出てくるのです。そして「描いて」と言ってくるのです。「この前まで描いていたじゃない。描けばいいじゃない」と言うと、「○○ちゃんのようにうまく描けない。だから描かない」ということを4歳児は急に言いはじめます。人と比較してできない自分が見えはじめるのです。だからすごくひがみっぽい行動を取る子と、威張りんぼうの子に分かれます。

運動会をやっても、いつも負けてしまう子どもは、「走らない」と言って、できないことから逃げようとしています。そしていつも1番になる子が、「俺は1番だね。○○ちゃん遅いね」と他の子に言いはじめます。つまり、自分と他者

の関係が分かりはじめるので、その分かったことに苦しむ子と、分かったことを威張る子と2タイプに分かれるのです。そういうときに保育者がぼーっとして何もしないと、常に人を馬鹿にしながら威張る心の形や、できないことから逃げようとする心の形がつけられてしまうのです。個性と言って、それを4歳児のときに固めては駄目でしょう。

これは4歳で放置されたら、年長では簡単に解決しません。小学校まで持ち越します。そして、結構一生ものの人間の個性になってしまう危険性があるのです。だから、いばりんぼうには、「あんた、人を馬鹿にして威張っている場合ではない」という姿勢できちんと向き合わないといけないし、自信がなくひがんでいる子には、その子に自信をつけながら、頑張れば何でもできるという体の感覚を4歳のときに身に付けさせなければいけないのです。自分と他者の関係が分かる時期だからこそ、子どもに任せてはいけません。

三つ目は現実と虚構の間です。想像と虚構の世界を拡大する時期です。だからそこはもっともっと広げてやらなければいけません。

この三つの間が子どもの中にはっきり見え、拡大するのが4歳児です。全部含めて内言、思考する言語と言います。具体的にはどうでしょうか。4歳の担任の人は、月曜日から楽しみにして行ってください。たくさん聞こえてきます。口頭詩も4歳だけ集まると面白いのです。「ママたちが血液型の話で盛り上がり、『私A型』『私B型』、すると4歳になる息子が口をはさみ、『僕新潟』」。どうでもいいですね。これは言葉の中で、「がた」「がた」という同じ音の集合という概念が付いてきて、言葉の中に同じ音があることが分かりはじめる。だから4歳児はしゃれが楽しめるようになるのです。しゃれや言葉遊びが非常に面白くなるのは、言葉の中にある共通項だけを取り出して、認知する賢さが育ってくる証なのです。『お湯かげん』。隣のうちでお風呂に入れてもらったとき、あまりに熱かったのか、4歳の息子が一言。『おばちゃん、僕猫舌なんだけど』。お湯は飲んではいけません。でもこれも具体的な出来事を抽象的な言語に置き換えようという4歳の賢さがつくる言葉なのです。

『仲間はずれ』 ヒラオカダイスケ4歳。『お母さん、お友達が売り切れになっちゃった』。友達は売らないですけれども、これも一緒でしょうね。現実に来た具体的なことを一般的な言葉に置き換えたら、売り切れ、びったりですね。

『お父さん指は仲間はずれ』。4歳の娘が着物を着ておばあちゃんの家に行



くときに、玄関で下駄をはこうとして、大きな声で、『下駄はお父さん指だけ仲間はずれにするんだよね』。そうです、1対4の集合が分かるのです。このときお母さんが、「うちのお父さんと一緒だよ」とか言わなかっただけ良かったです。

『不思議な目』。僕の目はこんなに小さいのにどうしてこんなにいっぱいものが見えちゃうのかな。不思議でしょう。この小さな目に、こんなにたくさんさんの世界が入っているわけです。これってどういうことというのは誰も説明できません。それぐらい不思議なことの理屈を探しているのです。

『男と女』 ヨツジモエコ。『お父さんは男だから新聞を読んで、お母さんは女だから広告を見ている』。我が家の法則が分かっていますね。

4歳児は本当に結構いいことを言います。内言が育つと、「何かね、〇〇ちゃんがないと寂しくなって、気持ち悪くて、元気がなくなっちゃうんだ」と、いい子ですね、こんなことを言っている4歳児がいます。そうです。4歳のクラスで、内言が育つときは、保育者がべらべらしゃべり過ぎてはいけません。こういう心の声、しゃべらない声を聴くには、相当ゆったりした気持ちで、4歳児の会話に耳を傾ける余裕がなければいけないのです。すぐに子どものところへ入り込んで、結論を先に出してしまうような係をしてはいけません。考えている子どもの頭の動きと対話するのです。その時間を共有することが、4歳児保育の何よりのポイントです。

そんなことをやっていると、4歳の子たちはいいことを言います。これはある幼稚園の事例です。五人の幼児が大型積み木で家をつくっていることです。五人の中でY君が家づくりを頑張っていたので、Tちゃんという女の子が、Y君のことを認めて、他の子に主張するのです。「ここはY君がつくったから他の子は使っちゃ駄目なんだよ」。Tちゃんはちょっと君が好きなので、Y君のことを守ろうとしました。そうしたら賢めのAちゃんが正論を吐きます。「みんなのだからみんなでするんだよ」。そうです。Aちゃんの言うとおりです。Y君だけのものではないのです。そうしたらY君が、自分を守ったはずのTちゃんをなぜか責めはじめました。「謝ってよ。幼稚園のものはみんなのものだよ」。Tちゃんは、こんなはずではなかったとみんなに責められて、しゅんとなって下を向きます。

みんなから批判されて、Tちゃんは下を向いたまうつむいていました。そ



うしたら追い打ちをかけるようにY君が、「Tちゃんなんか嫌いだ」と言うので、もっとショックを受けるわけです。Aちゃんが「強く言わないの。嫌いなって言わないの」とお母さんみたいにしゃべります。ずっと黙って固まっているTちゃん。何を言っても固まっているので、AちゃんとYちゃんともう一人の子が、「黙ってるなら行っちゃうよ」と言って、五人のうち三人が行ってしまいました。Tちゃんは下を向いています。

そこにSちゃんという一人の女の子が、何も今までしゃべっていなかったのですけれども、残りました。そしてTちゃんに語ったのです。「ちゃんと謝ればちゃんと友達になれるよ。私も子どものころは自転車に乗れなかったけど、自分を信じて頑張ったら乗れるようになったんだから。だからTちゃんも自分を信じて」。なぜ自転車の話なのでしょう。よく分かりません。でも分かるのです。このやりとりを見て、Sちゃんはじっと心の中で考えていたのです。「Tちゃんは気が強いから、こういうときに『ごめん』って言えないんだよね。だからみんな行っちゃうんだよ。ここは自分を信じて、自分を変えるべきだ。ごめんと言言ったら、全てが変わるのに」と心の中で考えたのです。「でも自分で変わらなきゃ。そういえば私も自転車に乗れなかったとき、お父さんが『自分を信じて頑張ってみよう』と言ったら、できた。だからTちゃんも自分を信じて言ってごらん」と、自分の経験を使いながら、Tちゃんに語ってやらなきゃと思って、しみじみと語るのです。あなたもまだ十分子どもですが。

こうやって4歳児は語るのです。こういう言葉を聴く余裕を持つと、4歳児っていいなと思います。全ての子どもたちに、4歳のときにこうやって考えながら生きる、考えながら関係をつくっていく力を付けて、5歳に上げてやりたいです。4歳の保育がすごく重要な気がします。

12. さいごに

今日皆さんに一番お話ししたかったことは、子どもは声を持った主体だということ。大人がいろいろなことを教え、無知・無能な子どもを賢くするのが保育なのだ、教育なのだ考えるなら、大人はいっぱいいっぱい子どもに教えてやり、しつけをしてやらなければいけないでしょう。でも、子どもたちは一人ひとり個性を持ちながら、自分で理論をつくり出し、自分で判断し、自分でいろいろなことに疑問を持つ主体なのです。それをやはり大事にしたいので





す。

子どもは赤ちゃんのころから自我の声を持って生きています。「これ面白そう」「あそこへ行ってみたい」「これは嫌」というふうに、自分の思いを主張する言葉を持ちながら生きるのです。でも、それと同時に、二つ目の言葉を2歳のころから豊かにしていきます。第二の自我というものです。これは外にある価値を自分の中に取り込んでいきます。この二つの世界が豊かになると、3歳児から4歳児にかけて、自分の中にある知性が化学反応を起こして、私の理論をつくりはじめていきます。そこに子どものすごさがあるのです。子どもは白紙の状態で、いろいろなものを教えられる存在ではないのです。2種類の言葉を自分のものにしなが、それをつなげた新しい自分だけの言葉を持ちます。それによって、自ら理論をつくり、自ら判断し、自ら疑問を持つ主体として育つということなのだと思ひます。

もう少し難しい言葉で言うと、ばらばらな知識をためておく存在ではなく、つなげて関係付けていく主人公なのです。考える主人公が、人生を始めていく6年間の中で育っていくということが重要です。私たちは大人になっても受け身で生きている存在ではありません。勝手に生きている存在でもありません。能動的だけれど共同的に生きていく、そういう主体として育っていくために、6歳までの人生がすごく大事なのです。

子どもの声をどのように聴き、どのように育てるかという保育がとても大切なのだと僕は思ひます。子どもが自分で理論をつくり出し、知識を構築する主人公だと考えるなら、保育・教育実践で何よりも大切にしなければいけないことは、子どもにたくさん話すこと、たくさん説明すること、たくさん伝えることではなく、子どもが考えている世界に、子どもが意味をつくり出している世界に、耳を傾けることです。これはイタリアのレッジョ・エミリアでこの保育をつくっているカルラ・リナルディさんが言っている言葉です。僕はそう思ひます。子どもの声に耳を傾ける、そして子どもが意味をつくり出す主体であることを尊重するという保育をぜひつくってやりたいのだと思ひます。

あと一つお話ししたかったのは、だからと言って聴いていけばいいのかというと、そうではないということです。聴いた上で何をするかという、切り返す質を高めなければいけないのです。さあそれをどうするかという話をしようかと思ひましたが、時間が来てしまいましたので、これはこれからゆっくり考え

ましよう。ただ、それは一つの方法で答えが出るわけではないので、ぜひお願いしたいことがあります。恐らく皆さんは、それなりに自分で努力しながら、子どもとの関係づくりをしていると思います。でも、それは自分の世界で努力をしているにすぎないのです。そのことをぜひ実践研究のスタイルとして、七面倒くさく、回りくどいだけでも、子どもとの間でやったことを記録に書いて、自分の記録を仲間と一緒に語り合い、意味付けていってください。こういう営みを繰り返しやりながら、自分の勘とコツの精度を高めてください。そういうことをやっていく必要があると思っています。

ユズちゃんとヨシコちゃんのやりとりについては、2歳の時期にごっこの世界で第二の自我を共有して育とうとしたせっかくのチャンスをつぶそうとしたということ、ごっこの世界を広げて、社会的知性を共有するだけでこのクラスは違ったクラスになったということを知り、自分の勘とコツをある理論とつなげられたことで、初めて生かされた理論を持つことになったのです。今までは借り物の知識・理論で、知ってはいたというものだったけれども、自分の実践を語ることによって、初めてその理論が生きるのです。理論が生きたときに初めて、体にすくとんと落ちた理論になります。その体にすくとんと落ちた理論を持つことが、明日からの実践を変えていきます。「啐啄同時」と言いましたが、保育者はその努力を繰り返さない限り、目の前の子どもがさまざまな形で出てくる要求にぴったり合った切り返しをしながら子どもの育ちをサポートする専門家に育つことができないのです。面倒くさいけれども、ここの営みを大事にしながら、ぜひ保育の質を高めていただきたいです。

それから、いつ使えるか分からないかもしれないけれども、借り物とはいえず、たくさんの正しい知識を学ぶ機会を持ってください。知識が豊かになれば実践が良くなるかという、そんな単純なものではありません。でも、知識が空っぽだったら、いくら実践しても意味付けることができません。これをつなげるためにも、必要な知識、自分の心を打つ知識を学ぶことも忘れないでください。それが化学反応のようにつながったとき、保育の質が高まっていきます。それを繰り返し、繰り返しやりながら、子どもの幸せのために、子どもの声を生かすために、実践のプロとして頑張ろうという思いを込めて、話を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。